

### 13. ジョン・ボール

先日新街口の紙屋に一本ボールペンを買いに行き、電柱に新しく貼った長いビラがあるのを見て、ちょっと近寄って見た。孫中山先生の一周年記念会が印刷したもので、“いかなる属性の帝国主義をも打倒せよ”という十一字であった。終わりの四字の意味は一般の北京市民には恐らくそれほど明瞭でないだろうし、“いかなる属性の”はきっと解らないに違いない。その中に含まれる深奥な意味となつては、わたしもそれがどの方面から貼り出されたものかを訊いて始めて解つたので、内容を知らない人にとってはむしろ解釈のしようがなく、ただ茫然と俺の字のお札を見たように思い、その神通力がどこにあるのか分からない。こうした古典的な宣伝のスローガンを見ると、そこで又イギリスの反逆僧の約翰球の話思い出した。

約翰球とはジョン・ボール (John Ball) の漢訳である。“彼はキリスト教の神父である。彼の説教はあの一三八一年の農夫の乱を助成した。彼は‘ヨークの聖マリアの僧’と自称し、おそらく彼はもともとそこの聖マリア寺院の客僧であったことを言うのだろう。しかし彼の一生の大事業はウェセックス、特にコルチェスター周辺一帯においてであった。彼の説教はたいそう早く始まり、一三八一年の二十年前であつたらしい。一三六六年彼はすでにカンタベリ主教のサイモン・ラングハムの前に引き立てられ、監禁されたと伝えられる。彼の罪名は、人に非を為さしめたである。だが彼は少しも警戒せず、そのあとノリッジとカンタベリと両処の主教から破門を宣告された、(教会を追い出されたばかりか、永遠に地獄に墮ちる、とされた。) 彼はいささかウィクリフの主旨に帰依したようで、教会に入ることを禁じられた後も、相変わらず市場や墓地で説教を続けた。一三七六年勾引状を出して彼を捉え、破門された人間とした。一三八一年四月末メイドストーン地方の大主教の監獄に拘禁された。乱党の最初の行動の一つがつまり彼を救い出そうとすることだった。六月十三日彼は叛徒らに対してかの有名な説教をした。主題は二句。

初めアダムが耕し、エヴァが織った、  
その時誰が紳士で金持ちであつたか。

(Whan Adam dalf and Eve span,  
Whan was thanne a gentilman?)

サッドベリ大主教が捉えられて首を切られた時、彼は真つ先に物見櫓に突進した一人であつたという。英王がスミフェルトで乱党と交戦した時も彼は現場にいて、首領タイラーの失敗をその目で見たかもしれない。叛徒たちが壊滅して逃散したのち、彼はコヴェントリに逃げたが、たちまち捉えられ、セント・アヴァンスへ押送され審問された。審判の時も彼はとても勇敢で、英王に赦罪を請わなかつた。彼は大逆と判決され、七月十五日セント・アヴァンスで絞首に処せられ、腹を割かれ、屍体をバラバラにされた。”(右は Henry Bett の『わらべ唄の起源とその歴史』、第三章“数と記憶”を論じたところに見え、ジョン・ボールの物語が今のわらべ唄の中に余韻を留めていることに言及している。)

初めアダムが耕し、エヴァが織った、  
その時誰が紳士で金持ちであつたか。

キリスト教の僧侶が反貴族運動を宣伝するのに、この二句の言葉はなんと巧妙で、身分口調全て合わぬものはない。これはあるいは後世の宣伝家の模範となるかもしれない。

※初出：1926年3月22日『語絲』第71期